

かりアゴを出して動けなくなっていました。彼はふだんは酒を飲まないところへ、特別強いチャンを飲まれたうえの強行軍ですから、参るのは当然です。どうもコックの奴が「最後にシゴイテやれ」と、地理に明るいのを幸い引き回した感じです。やっとのことでゴダワリの植物園についたのが午後8時。レレからこんなにかかるはずはないのです。先行した人夫の手配でジープが来ており、9時すぎに家へ帰りつきました。

今回の出費は、人夫賃は別で一人当り70ル

ピー(2520円)だそうです。これは帳面づらに出た金額を二等分したもので、本当はB君がかなり背負い込んでいるはずですが、もっとも僕の出張費は全額B君に預けてあり、そもそも役所からいくらもらったのか知りません。精算してお釣りをもらったわけではないので、赤字か黒字かもわかりません。僕自身は途中でチャンに1ルピー(36円)使っただけでした。

(金井弘夫 Hiroo Kanai)

新刊

□濱田 仁：接合藻の生物学 264pp. 1990. 私費出版(〒939-03 富山県射水郡小杉町南太閤山9-44. 電話0766-56-6658). ¥2,200.

著者が永年研究対象としてきた単細胞性の接合藻ミカヅキモが中心であるが、糸状のアオミドロをはじめ他の接合藻も登場して接合藻の全体像が解説される。第1章の採集と観察の方法から始まり、2. 培養の方法、3. 生育環境、4. 環境汚染の指標生物としての接合藻、5. 形態と細胞構造及び分類、6. 接合藻への放射線の影響、7. 無性生殖と有性生殖、8. 生活環と核相、9. 遺伝、の計9章より成り、巻末に名前とその由来及び用語の解説が添えられる。3章と4章は著者が日頃深い関心をもって進めてきた調査結果を中心に論議が進められ、最近の環境汚染の問題を考える上で示唆に富む内容となっている。8章は著者が最も力を注いだ部分と思われ、培養と藻体のDNA量の測定等の著者自身の研究結果から、ミカヅキモやアオミドロなどの接合藻の栄養体の核相は従来考えられているように半数ではなく、倍数であると結論し、さらにDNA量から生活環の各ステージの核相の類推を進めている。ミカヅキモやアオミドロは広く親しまれた名の藻であるが、それらの生物学的全体像を扱った類書はなかった。本書の刊行が歓迎されるゆえんである。なお目次と本文の標題の一致しない箇所が幾つか見られる。次版での改定を望みたい。(千原光雄)

□Kramer K.U. and Green P.S. (eds.): Kubitzki K. (ed.) *The Families and Genera of Vascular Plants Volume I. Pteridophytes and Gymnosperms*. i-xiv+404pp+216 figs. 1990. Springer-Verlag, Wien.

近年における植物分類学の知見の増大は目ざましい。それにもかかわらず、というべきか、だから、というべきか、維管束植物の分類体系を包括的にまとめるのは大変困難なことである。この難かしさを克服しようとし、分類体系の現状を総覧し、この分野における研究のさらなる活性化を目指して編纂された大著の第1冊がやっと出版された。やっと、というのは、私が依頼を受けてコケシノブ科の原稿を送ったのはもう何年か前になるからである。

近年の研究成果を網羅したという当然ともいえる唱い文句にもかかわらず、でき上りについては首をひねりたくなるところがある。科の配列は、それぞれの高次分類群ごとにアルファベット順とされた。系統関係が分かっていない科の間の関係に予断を与えないため、という理由づけはそれなりに1つの理屈ではあるのだが、それにしては科の設定の仕方が何とも大胆なのである。この種の体系の整理は、どちらかというと保守的な範囲づけで解説された方がよいと私は思っているが、左程の根拠も示されないままに、勝手な科の範囲の設定をするのは、どうせ客観的な根拠はないから、という開き直りなのだろうか。確かに、保守的に

なれば、科の概念は既成のものがあるという雰囲気醸し加ねず、その意味では、まだよく分かっていないということを、独特の体系で示すという意義はあるのかもしれない。しかし、一方で、植物名がしばしば変更されて困るという利用者の要望から、植物の統一名リストを作ろうとしている時代に、一般の利用者は無視して分類体系を研究する者だけが使えばよいとでもいうのか、無用の混乱を招くのはあまり賞められたこととはいえない。

具体的にいうと、シダ植物の科について、コバノイシカグマ科、イノモトソウ科、オシダ科が広義に取られているのに対して、オオフジシダ科、タマシダ科などが独立に扱われる。また、ヒメウラボシ科、コケシノブ科、ヒメシダ科などで、属が比較的広義に定義されるのに対して、ヒカゲノカズラ科、ウラボシ科などは細分説に依ってまとめられている。多数の著者が関与すれば多少の体裁の不一致は我慢しなければならないが、編集方針として、分類群の設定の方針は著者に任されていた。問題の在りかを直截に描き出すことをこそ意図されたというべきだろうか。それならば、読者ははじめからそのつもりで接しなければならない。この抄録でも、体系を頭から丸呑みにする利用の仕方をしない方がよいということをはっきり指摘しておきたい。

問題を現代的に捉えるきっかけとしては、示唆に富んだ論述が随所にみられる。元来、分類体系を論じる書は問題提起が最重要課題であり、その意味では本書の編集はよい成果をあげているといえるだろう。(岩槻邦男)

□中国植物志 第三卷第一分冊 i-x+306pp+77 pls. 1990. 科学出版社, 北京. 平装本 18元, 精装本 21元.

中国植物志のシダの部分は、1959年に第二巻が出て以来沈黙を続けていた。その間、文化大革命の時代に、秦 仁昌先生が準備しておられた2巻分原稿が焼き捨てられるというような不幸な事件もあったと聞いている。久し振りに姿を見せることになったこの部分では、ワラビ科、イノモトソウ科(呉 兆洪)、ミミモチシダ科、ステノク

ラエア科、ヒメウラボシ科の大部分、イヌアミシダ科(邢 公俠)、ヒメウラボシ科の残りの一部(武 素功)、ホウライシダ科、ミズワラビ科(林 尤興)がそれぞれに示した著者によって著わされている。

秦 仁昌先生が亡くなってから、中国のシダ学者の間には、過度に細分された秦システムに反省が始められてはいるものの、本書の科や属の配列は秦システムに従ったものである。批判をする人はあっても秦 仁昌先生を凌駕して多くの人を納得させる修正を提議できる人はないということである。しかし、種の扱いについては、マレーシア植物誌と比べれば細分主義だといえるものの、それなりに分かりやすく、国際的な通念に照らしてもよく理解できるものになっている。日本のシダとの対応のためにも大変便利な書であり、中国の人達の研究成果が見事に結実したものといえる。残りの部分が順調に刊行され、1959年の第2巻が改訂されることを期待したい。(岩槻邦男)

□中尾佐助: 分類の発想 B6版. 331pp. 1990. 朝日選書. ¥1,300.

分類ということは社会のあらゆる面で行われている操作である。著者はそれを生物学の面で考えてみようとした異色の本である。分類学にとってはそれがかなりの比重を占める研究手段だから、その基本的な論議がなされなければならないのだけれど、今迄そのような論議は殆どされたことがなかった。問題を提起するだけでも意義のある試みである。著者は分類を類型分類、規格分類、系譜分類に大別し、それ等を総合したものを動的分類と呼ぶ。こうした概念を基に生物学の様々な事象を例として解説している。著者の関心は生物学だけでなく、人類学、言語学から宗教にまで及び著者の興味の広さを思わせ、私のようなその方面に門外漢のものには面白く読ませる所でもある。折角の中尾氏の貴重な提案だから、それを批判することで今後の実りのある発展を期待したい。

著者は分類という言葉を非常に広い意味に使っている。普通の分類の概念からはみだしているのにとまどいを覚える。自家不和合は雌しべが花粉を類別することによるが、これをアイデンティ